



元禄15年（1702）12月15日未明、赤穂藩の旧臣47人が本所松坂町の吉良邸を襲撃し、前当主上野介義央の首級を挙げました。世にいう「赤穂義士の討ち入り」です。港区には元禄赤穂事件に関わる史跡が数多く残されています。

事件の発端は、元禄14年（1701）3月14日の年賀返礼の儀式直前、勅使饗応役を務める赤穂藩主浅野内匠頭長矩が江戸城ちよくしきょうおうやく松之大廊下にて指南役を務める高家の吉良上野介義央に切りかかったことに始まります。

上野介は応戦せず、内匠頭は旗本梶川與惣兵衛に取り押さえられました。重要な儀式直前に刃傷事件を起こしたことに激怒した將軍徳川綱吉は即日、内匠頭に切腹と改易を命じ、内匠頭は陸奥一関藩田村家上屋敷（→20ページ）に送られ、その日のうちに切腹し、家臣の手によって泉岳寺（→23ページ）に葬られました。

翌15日には内匠頭の正室（夫人）阿久里あぐり（瑤泉院）が実家の三次藩邸（→21ページ）に移り、鉄砲洲の上屋敷や赤坂南部坂の下屋敷も明け渡しました。国許には3月20日に伝わり、藩内では家老大石内蔵助おおいしくらのすけを中心よしたかに議論が交わされましたが、結局、開城を決め、4月19日に赤穂城を引き渡しました。

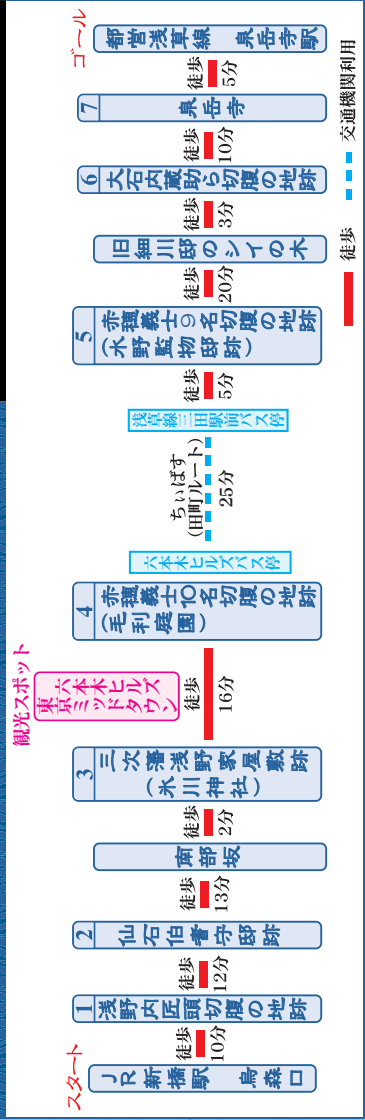
野に下った赤穂藩の旧臣は浅野家再興の運動を進めますが、その望みが絶たれたため、急進派の案をいれ吉良邸への討ち入りを決定します。そして内匠頭の月命日にあたる翌15年（1702）12月14日（実際には15日未明）に討ち入り、上野介の首を挙げます。事を終えた大石らは泉岳寺の内匠頭の墓前に報告した後、大目付仙石伯耆守邸へ出頭します（→20ページ）。大石らは熊本藩細川家・松山藩松平家・岡崎藩水野家・長府藩毛利家にそれぞれ預けられ、翌16年（1703）2月4日に切腹しました（→21～23ページ）。

事件が起きた元禄時代は、5代將軍綱吉の治世下で武断政治から文治政治への転換がはかられ、將軍や幕府の権力が盤石になった時代です。また、経済の発展に伴い庶民の生活が向上し、様々な文化が花開いた時代でもありました。このような太平の世になりつつある時代に、数十人が徒党を組んで旗本高家の邸宅を武力で制圧し、前当主を殺害したこの事件は幕府に大きな衝撃を与えました。そして幕府以上にこの事件を大きく扱ったのが庶民でした。人形浄瑠璃や歌舞伎の題材に取り上げられ、様々な物語をつむぎながら、史実の「元禄赤穂事件」とは異なる『忠臣蔵』物語として現代まで受け継がれています。





コースルート・所要時間



元禄赤穂事件の故地をゆく



コラム 『忠臣蔵』の世界と港区

「赤穂義士の討ち入り」といいますと、多くの方は『忠臣蔵』を思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、厳密にはこの2つはイコールではありません。もちろん、浅野内匠頭が江戸城松之廊下で吉良上野介に切りかかり、幕府から切腹と改易を言い渡されたこと、また大石内蔵助ら浅野家の旧臣47人が吉良邸に討ち入り、上野介の首を挙げたことはまぎれもない事実です。ただし、私たちが『忠臣蔵』でよく知るお軽・勘平の物語などは完全な創作ですし、内匠頭が上野介に切りかかった理由についても、賄賂説、乱心説などがまことしやかに流布していますが、実ははっきりとした理由はわかっていないのです。このように「元禄赤穂事件」で思い浮かべる名場面の多くは、『忠臣蔵』という物語によっ

て創り出されたものなのです。

赤穂義士の切腹後間もない元禄16年（1703）2月16日、中村座でこの事件を曾我物語になぞらえた『曙曾我夜討』が上演されますがすぐに幕府によって禁止されます。3年後の宝永3年（1706）には上方で近松門左衛門の作による人形浄瑠璃『碁盤太平記』が上演され、塩冶判官（浅野内匠頭）、大星由良之助（大石内蔵助）、大星力弥（大石主税）といった配役の原型が作られます。その後、『鬼鹿毛無佐志鑑』、『忠臣金短冊』などの作品が生まれ、吉良邸討ち入りから46年目の寛延元年（1748）にこれらの作品を集大成する形で、竹田出雲らの合作による人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』が完成し、大坂竹本座上演されます。これが大好評となり歌舞伎に取り上げら



芳幾 仮名手本忠臣蔵



豊国 高輪 由良之助
『東海道日本橋品川間』

れ、江戸でも森田座、市村座、中村座の江戸三座で競演されることになりました。以後、『忠臣蔵』といえば『仮名手本忠臣蔵』をさし、様々な演技・演出が加えられ、また錦絵や子ども向けに作られたおもちゃ絵（例えば、芳幾「仮名手本忠臣蔵」）などの題材となります。

赤穂義士が終焉を迎える港区には『忠臣蔵』物語を語る上で重要な場所があります。赤穂義士が本懐を遂げ、主君が眠る泉岳寺へと報告に赴くところは物語のラストシーンを飾る重要な場面です（ただし、歌舞伎では上演されない場面です）。彼らは本所松坂町の吉良邸を出た後、深川を南下して永代橋を渡り、八丁堀、築地、芝、高輪を経て泉岳寺に到着します。一勇斎国芳が描いた「忠臣蔵義士高輪引取之図」や、三代歌川豊国の



豊国 東都高輪泉岳寺開帳群集之図

『東海道日本橋品川間』 「高輪由良之助」も義士引き上げの場面を描いた作品です。また、歌川広重の『忠臣蔵』 「焼香場」は泉岳寺で内匠頭の墓前に向かう義士の姿を描いています。いずれも衣裳はきらびやかに描かれ、歌舞伎の影響を強く受けていることがみてとれます。あるいは、「東都高輪泉岳寺開帳群集之図」（三代歌川豊国）は、『仮名手本忠臣蔵』の登場人物たちが開帳で賑う泉岳寺に参詣に訪れるという趣向で描かれ、このように名所と『忠臣蔵』をリンクさせる作品も登場します。

江戸時代の中ごろに誕生した『忠臣蔵』物語は、明治、大正、昭和、そして現代にいたるまで小説や映画、舞台やドラマなどで繰り返し再生産されています。時代の世相や社会観、人生観が反映された日本人の心性に根ざした物語であるといえましょう。



広重 焼香場
『忠臣蔵』

元禄赤穂事件の故地をゆく

あさのたくみのかみ

浅野内匠頭切腹の地跡

所 新橋4-31付近

コース①

元禄14年(1701)3月14日、江戸城松
のおおろうか きらこうすけのすけ
之大廊下で吉良上野介に切りつけた播磨赤
穂藩5万石の藩主浅野内匠頭はその日の
うちに、このあたりにあった陸奥一関藩
たむらうきようのだいぶたけあき
田村右京大夫建頭の上屋敷に送られて切腹
し、赤穂藩は改易となりました。内匠頭は
座敷ではなく庭で切腹し、夕方に浅野家
かたおかげんごえもん いそがいにゆうろうざえもん
臣の片岡源五右衛門・磯貝十郎左衛門らが
遺体を引き取り、泉岳寺で葬儀を執り行っ
たといわれています。

日比谷通り沿いに「浅野内匠頭終焉之
地」という石碑が建っています。また、実
際の田村家上屋敷は日比谷通りから20
mほど東側(およそ現在の新橋4-2~
4、28~30)にありました。

都指



せんごくほうぎのかみてい

仙石伯耆守邸跡

所 虎ノ門2-8

コース②

元禄15年(1702)12月15日未明に吉良
邸に討ち入り、きらこうすけのすけ
吉良上野介の首級をあげた
赤穂義士は主君あさのたくみのかみ
浅野内匠頭が眠るせんがくじ
泉岳寺へ
向かいました。その途中、統領おおいしくらのすけ
大石内蔵助
よしだか
よしだちゆうざえもん とみのもりすけ
良雄は副統領格の吉田忠左衛門に富森助右
えもん おおめつけ
衛門をつけて、大目付(大名を監視する幕
府の役職)せんごくほうぎのかみひさなお
仙石伯耆守久尚邸に出頭させま
した。赤穂義士は内匠頭の墓前で報告を済
ませた後、寺坂てらさかきちえもん
吉右衛門を除く46人が仙
石邸に出頭しました。仙石伯耆守はすぐに
江戸城に登城し、老中につなよし
として老中の協議と將軍綱吉への報告を経
て、赤穂義士はそれぞれ細川家、毛利家、
松平家、水野家の各藩邸に預けられること
になりました。

都指

みよし 三次藩浅野家屋敷跡 (氷川神社)

所 赤坂6-10-12

コース3

赤穂事件が起きた元禄時代、このあたりは浅野安芸守（広島藩、浅野本家）、浅野内匠頭（赤穂藩）、浅野土佐守（三次藩）、浅野式部少輔（浅野土佐守の義父）などの屋敷がありました。8代將軍徳川吉宗の頃、ここに氷川神社が建立されましたが、元禄当時は浅野土佐守の屋敷であったと思われます。

元禄14年（1701）3月14日、浅野内匠頭は江戸城松之大廊下で吉良上野介に切りつけ、その日のうちに切腹しました。正室（夫人）の阿久里は髪を下ろして瑤泉院と改め、翌15日に実家の三次藩邸に引き取られました。

都指

赤穂義士10名切腹の地跡 (毛利庭園)

所 六本木6-9

コース4

江戸時代、この辺りには長門長府藩毛利家の上屋敷がありました。ここには赤穂義士47人のうち、岡嶋八十右衛門ら10人が預けられ、義士らが預けられた大名家の中でも特に待遇が厳しかったといわれています。元禄16年（1703）2月4日に切腹しました。このうち、間新六郎は介錯を潔しとせず、真の切腹をしたといわれ、遺体は親族に引き取られ築地本願寺に葬られました。

平成15年（2003）、長府藩毛利家の屋敷跡は六本木ヒルズとして様変わりしました。その開発事業の中で、大名庭園の手法を取り入れた毛利庭園が整備されました。

都指



元禄赤穂事件の故地をゆく

赤穂義士9名切腹の地跡 (水野監物邸跡)

所 芝5-20-20

コース⑤

きらくげのすけ

吉良上野介を討ち取り、大目付に出頭し

おめつけ

た赤穂義士は4家の大名に預けられます。
その1家が三河岡崎藩水野家で、9名が預けられ、元禄16年(1703)2月4日に切腹しました。水野家の中屋敷は説明板の建っている所より50mほど北側にありました。

なお、赤穂義士を預かった大名家のうち、細川家と水野家では彼らを丁重に扱ったといわれており、「細川(細川^{ほそかわえっちゅうのかみ}越中守)の水(水野^{みづのけんもつ}監物)流れは清けれどただ^{もうりかいのかみ}大海(毛利甲斐守)の沖(松平^{まつだいらおきのかみ}隠岐守)ぞ濁れる」という落首から当時の世評がうかがえます。

都指

おおいしちから

大石主税ら切腹の地跡

所 三田2-5-4

おおいしくらのすけ

ここは大石内蔵助の子息主税ら赤穂義士

10名が預けられ、元禄16年(1703)2月4日に切腹した伊予松山藩松平家の中屋敷があった場所です。義士が切腹した場所は土を掘りあげて池とし、その土で築山を造ったといわれています。後に築山の上には徳富蘇峰^{とくとみ そほう せんぶん}の撰文による碑が建てられました。現在、イタリア大使館の敷地内に建っています(ただし、参観はできません)。

討ち入りに参加した義士の中には、10代の青年が二人いました。大石主税と、水野家にお預けとなった矢頭右衛門七^{やとうえ もしち}です。右衛門七は18歳、16歳の主税は義士中最年少でした。

都指



【おおいしくらのすけ

大石内蔵助ら切腹の地跡

所 高輪 1-16-25

コース⑥

このあたりには肥後熊本藩細川家の下屋敷がありました。吉良邸に討ち入り後、統領大石内蔵助ら17名が預けられ、元禄16年（1703）2月4日に切腹した場所です。切腹の跡地として高松中学校の敷地の一部を堀で囲って保存しています。

先年、同屋敷の北端に当たる地点で発掘調査が行われました。この折、19世紀に埋め潰された井戸から、浅野内匠頭の辞世、大石内蔵助の歌を染め付けた磁器の酒坏が出土しました。赤穂事件が、人々の心に長く記憶されてきたことを物語っています。

都指



磁器酒坏



【せんがくじ

泉岳寺

所 高輪 2-11-1

コース⑦

泉岳寺は慶長17年（1612）に外桜田に創建された曹洞宗寺院です。寛永18年（1641）の寛永の大火で焼失し、3代将軍徳川家光により、現在の高輪の地に再建されました。この時、家光は毛利・浅野・朽木・丹羽・水谷の5大名に泉岳寺再建を行わせました。この縁により浅野家は泉岳寺を江戸における菩提寺とするようになりました。泉岳寺は曹洞宗江戸三箇寺の1つとして多くの学寮や子院を抱える大寺院でした。

泉岳寺の名を世に広めたのは、やはり元禄赤穂事件と『忠臣蔵』ブームでしょう。江戸時代から多くの人々が参詣に訪れ、今も毎年4月初旬と12月14日に義士祭が行われています。また、赤穂義士ゆかりの品々が赤穂義士記念館に展示されています。

赤穂義士記念館

時 間：9:00～16:00

料 金：大人500円、中高生400円、小人（10歳以上）250円、小人（10歳未満）無料
団体30名様以上割引あり

問い合わせ：03-3441-5560（泉岳寺）



元禄赤穂事件の故地をゆく

あさのながのり

浅野長矩・赤穂義士の墓

所 高輪2-11-1 泉岳寺

さんもん

山門をくぐり左手へ進むと左側に赤穂義

士記念館、右側に赤穂義士が吉良上野介の

首を洗ったといわれる「首洗いの井戸」が

あります。その先に浅野内匠頭長矩の墓所

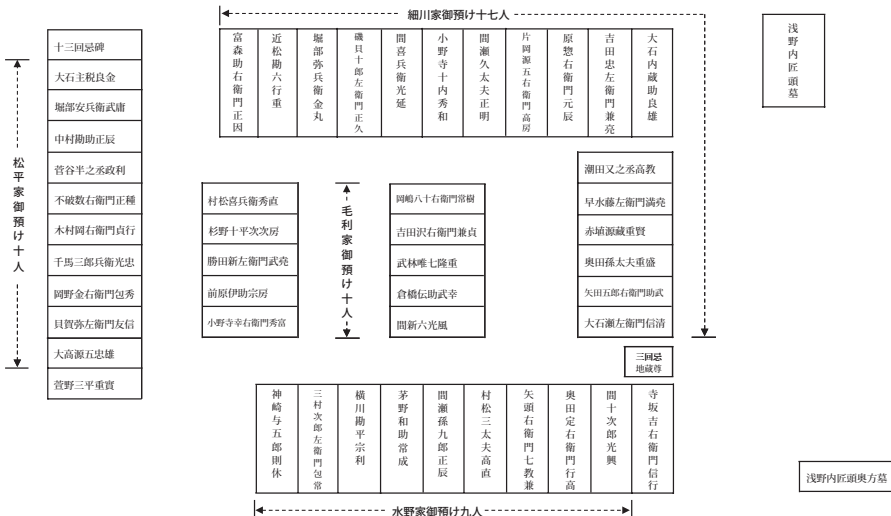
と赤穂義士47人の墓、また討ち入り前に

切腹した萱野三平の墓があります。

国指



墓配置図



長府藩毛利家屋敷での切腹者 (→21ページ)

岡嶋八十右衛門常樹	享年38
吉田沢右衛門兼貞	享年29
武林唯七隆重	享年32
倉橋伝助武幸	享年34
村松喜兵衛秀直	享年62
杉野十平次次房	享年28
勝田新左衛門武亮	享年24
前原伊助宗房	享年40
間新六郎光風	享年24
小野寺幸右衛門秀富	享年28

*なお寺坂吉右衛門信行は討ち入り後退去。

岡崎藩水野家屋敷での切腹者 (→22ページ)

間十次郎光興	享年26
奥田定右衛門行高	享年26
矢頭右衛門七教兼	享年17
村松三太夫高直	享年27
間瀬孫九郎正辰	享年23
三村次郎左衛門包常	享年37
茅野和助常成	享年37
横川勘平宗利	享年37
神崎与五郎則休	享年38

松山藩松平家屋敷での切腹者 (→22ページ)

大石主税良金	享年16
堀部安兵衛武庸	享年34
中村勘助正辰	享年46
菅谷半之丞政利	享年44
不破数右衛門正種	享年34
千馬三郎兵衛光忠	享年51
岡野金右衛門包秀	享年24
木村岡右衛門貞行	享年46
貝賀弥左衛門友信	享年54
大高源五忠雄	享年38

熊本藩細川家屋敷での切腹者 (→23ページ)

大石内蔵助良雄	享年45
原惣右衛門元辰	享年56
片岡源五右衛門高房	享年36
堀部弥兵衛金丸	享年77
吉田忠左衛門兼亮	享年64
近松勘六行重	享年34
間瀬久太夫正明	享年63
赤堀源藏重賢	享年35
潮田又之丞高教	享年35
森助右衛門正和	享年34
小野寺十内秀和	享年61
奥田孫太夫重盛	享年57
早水藤左衛門清茂	享年42
矢田五郎右衛門助武	享年29
大石瀬左衛門信清	享年27
磯貝十郎左衛門正久	享年25
間喜兵衛光延	享年69

慶長8年（1603）、徳川家康が江戸に幕府を開き、日本には「平和」の時代が訪れます。それから260年あまりが過ぎ、時は幕末を迎えます。幕府権力の衰退、黒船の来航などをきっかけに攘夷運動、尊皇運動、そして倒幕運動へと時代は流れていきます。この激動の時代の中で重要な舞台となった場所が港区には数多くあります。

外国からの大きなインパクトはやはり嘉永6年（1853）6月3日に浦賀沖に現れたペリー率いる4隻のアメリカ艦隊でしょう。

「泰平の眠りを覚ます上喜撰（蒸気船）たった四杯で夜も眠れず」という狂歌が詠まれたように、幕府だけでなく世の人々を驚かせ、日本を鎖国から開国へと導きます。ペリーの再来航に備えて幕府が急いで造った防衛施設が台場で、現在、多くの人々で賑わう「お台場」の地名の由来となっています（→28ページ）。今は2基が国の史跡として

保存されていますが、当時の土木技術の高さをうかがうことができます。

一方、日本国内では徳川幕府と薩摩藩・長州藩などの西国雄藩との軋轢、攘夷運動・尊皇運動の激化、治安の悪化など大きく揺れ動きます。港区には幕末政治史の舞台や主役といえる人々のゆかりの地があります。特に幕末から明治維新にかけて

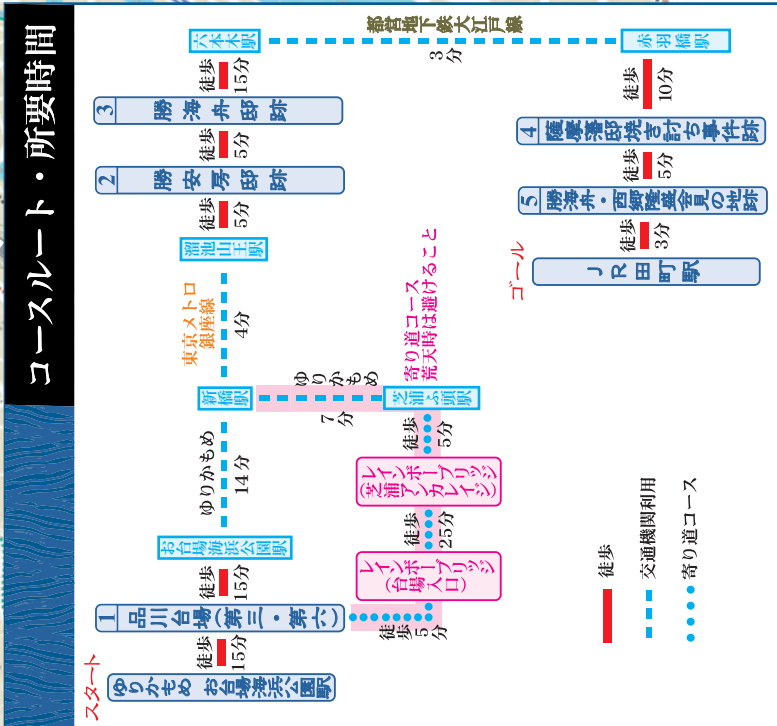
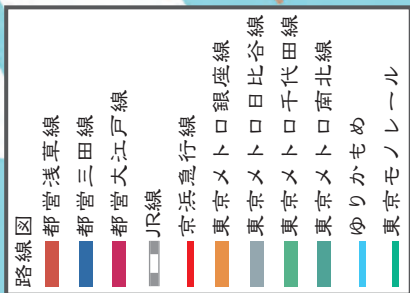
が複数存在し、様々な事件の舞台となりました。現在の芝2～3丁目あたりには約25,000坪の広大な居屋敷があり、戊辰戦争のきっかけとなった薩摩藩邸焼き討ち事件が起きました（→30ページ）。また、現在のJR田町駅前（芝5丁目）には抱屋敷、JR品川駅前（高輪3丁目）には下屋敷があり、いずれも勝海舟と西郷隆盛が江戸城総攻撃前に会見し、江戸城の無血開城が決められた場所です（→30ページ）。

また、この時代の幕府側の重要人物として最初に名前があがる勝海舟は永らく赤坂に住んでいました。居宅は時代によって移りますが、坂本龍馬との出会いで有名な屋敷や、明治維新後、亡くなるまで住んだ屋敷も赤坂にありました（→28、29ページ）。幕末から明治維新へと移りゆく時代の中で転換となった歴史的事件を追いかけてながら散策してみるのもよいでしょう。



中心的役割を果たした薩摩藩の屋敷 品川大筒町御台場出来之図





幕末・維新事件簿

品川台場(第三・第六)

所 台場1-10、1-11

コース①

嘉永6年(1853)6月3日、浦賀沖に現れたペリー率いる4隻のアメリカ艦隊、俗にいう「黒船」は幕府や世の人々に衝撃を与えました。翌年の再来航に備え、海防のため急いで築かれたのが台場です。幕府は伊豆菰山代官の江川英龍に命じ、品川沖に洋式の海上砲台を築造させます。当初は11基を一定の間隔で建設する予定でした。嘉永7年(1854)4月に第一、第二、第三、11月に第五、第六と御殿山下砲台が完成しましたが、すでに同年の3月3日には日米和親条約が締結されたため、2基は途中で工事中止、残る4基の建設は行われませんでした。台場建設に用いる石材は伊豆半島や房総半島から運び、埋め立てに用いる土は御殿山や泉岳寺裏の山を切り崩し、総額75万両、5千人の人夫を動員した大土木工事です。太平洋戦争後、第一・二・五台場は廃棄され、今は第三・第六台場が国の史跡として保存されています。

国指



勝安房邸跡

所 赤坂6-6-14

サン・サン赤坂

コース②

ここは勝海舟が明治5年(1872)から同32年(1899)に77歳で死去するまで住んだ場所です。海舟は明治維新後、旧幕臣の代表格として外務大丞、兵部大丞、海軍大輔、参議兼海軍卿、元老院議員、枢密顧問官を歴任し、伯爵に叙されました。ただし、積極的に仕事をしたわけではなかったそうです。一方、新政府に対する批判や日清戦争に反対するなどその舌鋒は衰えることはなく、また、旧幕臣の就労先の世話や資金援助などに努めたそうです。晩年は『吹塵録』、『海軍歴史』、『陸軍歴史』、『開国起源』、『氷川清話』などの執筆や編集にあたりました。明治32年(1899)1月19日、風呂上がりでブランデーを飲んだところで脳溢血になり、21日にこの地で死去しました。最後の言葉は「コレデオシマイ」だったそうです。

都指



かつかいしゅう

勝海舟邸跡

所 赤坂6-10-39

コース3

ここは勝海舟が安政6年(1859)から明治元年(1868)、37歳から46歳まで住んだ場所です。安政7年(1860)、海舟にちべいしゅうどうつうしうじょうやく ひじゅんしよは日米修好通商条約の批准書を交換する遣米使節団の護衛のため、咸臨丸かんりんまるの艦長(実際の肩書きは「軍艦操練所教授方頭取」)ぐんかんそうれんじよきょうじゆかたとうどりとして渡米しました。帰国後、蕃書調所とうどり こうぶしよほうじゆつしはん頭取、講武所砲術師範などを歴任し、文久2年(1862)に軍艦操練所頭取を経て軍艦奉行に就任します。同じ年の11月、坂本龍馬らが海舟を斬ろうと面会を申し入れ、逆に感化されたのもこの屋敷です。また、慶応4年(1868)3月に西郷隆盛さいこうたかもりと会談し、江戸城の無血開城を決定した時もこの屋敷に住んでいました(→30ページ)。その後、同年7月に徳川慶喜とくがわよしのおに従って駿府(現静岡市)に移るまで住みました。 [区警]



ヒュースケン暗殺事件跡

所 三田1-2、3、4

万延元年(1860)12月5日、アメリカ公使館通訳官ヒュースケンあかばねせつぐうは赤羽接遇所しよ ぜんぶくじから麻布善福寺の公使館に帰る途中、待ち伏せていた攘夷派浪士伊牟田尚平・樋渡八兵衛ひわたりはちべえらに襲われ命を落としました。場所は新堀川に架かる中ノ橋しんぼりかわ なかのはしの北側付近で、ヒュースケンは即死はまぬがれましたが、医師の手当でも及ばず翌日死去しました。28歳でした。この時、警備にあたっていた幕府外国奉行支配手附がいてくぶぎょうしはいてつけ すずぎぜんのじょうの鈴木善之丞らは襲撃者に抵抗せず逃げたため、諸外国の代表は外交官警固の不備を強く非難するとともに横浜に退去し、大きな外交問題へ発展します。これに対して幕府は外交官の警固と公使館の警備を強化し、またアメリカ側の要求によりヒュースケンの遺族に1万ドルを支払って事件を落着させました。ヒュースケンは3日後の12月8日に麻布の光林寺こうりんじ(南麻布4-11-25)に葬られました(→36ページ)。

幕末・維新事件簿

薩摩藩邸焼き討ち事件跡

所 芝3-23・33、芝5-7付近

コース④

現在の芝2・3丁目の大半と4・5丁目の一部は、江戸時代、薩摩藩島津家の広大な居屋敷でした。慶応3年(1867)10月14日、大政奉還により徳川慶喜は政権を朝廷に返しましたが、依然として旧幕府と薩摩藩・長州藩は緊張した関係にありました。複雑な政治情勢の中、薩摩藩らは旧幕府軍と交戦する大義名分を得るべく、慶喜ら旧幕府首脳の大半が不在であった江戸で戦意を煽る工作活動を行います。その拠点となったのがこの藩邸でした。そして薩摩藩が江戸市中取締の庄内藩屯所を襲撃したため、その報復として同年12月25日に庄内藩らがここを攻撃し、藩邸は砲火によって焼失しました。この事件は戊辰戦争のきっかけの1つになりました。藩邸の痕跡は今では残されていませんが、芝3丁目23・33の一面に「薩摩小路」の名称がつけられ、往時を偲ぶことができます。



勝海舟・西郷隆盛会見の地跡

所 芝5-33

コース⑤

慶応4年(1868)3月13・14日、徳川家側の^{おおく ぼ いちおう}大久保一翁(忠寛)・勝海舟と官軍側の^{たけひろ}西郷隆盛が会見しました。すでに3月9日に徳川家の^{やまおかてつしゅう}山岡鉄舟が駿府(現静岡市)に赴き、西郷と会見して交渉の下ごしらえをしていました。15日の江戸城総攻撃直前の13日に予備的な会談を薩摩藩の^{かえやしき}拝借地で、翌14日にこの碑が建っている薩摩藩抱屋敷で最終的な話し合いが行われました。その結果、江戸城総攻撃は中止され、江戸は戦火から救われました。この地は江戸城の無血開城という歴史上重要な決定が下された場所なのです。なお、勝海舟はこの会談が破談したときは、江戸の町を焼き払い官軍の侵攻を止める作戦を練り、準備を進めていたそうです。江戸城は4月11日に開城し、大総督府が接收しました。

〔都庁〕

